

73 正骨家吉原杏蔭齋に関する新資料と

その門下生

蒲原<sup>1)</sup> 宏・川畷<sup>2)</sup> 真人

『杏蔭齋正骨要訣』の著者吉原杏蔭齋元棟・隆仙は長崎木下町に住み寛政十二年(一八〇〇年)十二月十三日に没している。

元は武士であったが正骨術に巧みであり、吉雄耕牛(二七二四〜一八〇〇)も師事し、吉雄流外科の一術として『吉雄流正骨書』としてこれを取り入れていた。

杏蔭齋正骨術が何時頃体系づけられたかについて拙著『日本整形外科前史』で、寛政五年前後から同十一年頃との推論を述べておいた。しかし、最近中津市の旧中津藩医大江家に伝えられた、吉原元棟から大江定武(一七八〜一八二五)に与えられた正骨術允可の「杏蔭齋正骨術名之目」という卷子の発見によって、天明七年(一七八七年)には正骨術の体系化は成立していたことが判

明した。一・九メートルの卷子には次の如く

杏蔭齋正骨術名之目

第一熊顧術	主頰項骨	附法二術
第二風車術	主肩髀骨	附法二術
第三鸞翔術	主肩髀骨	
第四靡風術	主胸肋骨	附法二術
第五鶴跨術	主脊骨	
第六圓旋術	主肘骨縫	附法四術
第七游魚術	主腕骨縫	附法兩手指
第八尺蠖術	主膝頭	并内外輔骨附法二術
第九弄玉術	主踝骨縫	
第十鴿尾術	主附骨	
第十一螺旋術	主跟骨	
第十二燕尾術	主髀樞骨	附法二術
第十三騎龍術	主腰胛骨	附法一術

術名終

落丁謨(復) 合手之術

回生之術

諸症藥法

右件之條目者予正骨之術備焉藥予數十年來研精于此伎  
 稍々有所得者乃誠之于藥石之難治者未曾不奏其効也 於  
 是乎立一家術以教同好士云竇大江定武夙入吾門勵精久之  
 輒今以悉授其秘且書其條目附焉而不許法伝之他者亦恐道  
 之廢也 噫呼違己難小技亦係人之性命豈可不慎乎豈可不  
 慎乎

崎陽 吉原 元棟 (花押) 印 (杏蔭齋)

天明七丁未朱明四月

大江定武殿

と杏蔭齋正骨術の基本形が記してある。吉原元棟の直筆  
 の墨跡、花押、印は初出のもので第一級の貴重な資料で  
 ある。『杏蔭齋正骨要訣』への編集は吉原元棟の稿本を  
 和田謙堂(龍ヶ岡)と綾(阿耶)大哉(含弘)(丸龜)の  
 同校によつて大略完成するが、その後、長州の回村英仲  
 が重校したことが京大富士川文庫本キ一四九の左の附文  
 で知る。

此書先年余與播州田鎌堂同校正以蔵於先生之家矣而  
 不日謙堂帰郷余滯于此蓋有年焉而之與長州村英仲者同重  
 校之去年英仲物故于此地余今年將帰郷時詣先生之処又聞

之間有謬誤且術之未備者因令與先生同正其誤補其缺自書  
 以蔵於之杏蔭齋中然未無謬誤後來之門人若視其誤則告先  
 生而速正之外有藥方及治驗之草未校正欲是故余携版帰不  
 日大成以上之梓若有同好門人思佐若先生之業者千里以書  
 致其意余素戈不何獨仇先生之業冀待他日英戈之來耳

その他静嘉堂大槻文庫本『杏蔭齋正骨要訣』(二二七

三二一―九七四八) 凡例附文に「樋樿齋」の加筆がある。

吉原元棟の門下生は吉雄耕牛・二宮彦可、和田謙堂、綾  
 大哉、回村英仲、大江定武が確実である。樋樿齋、吉村雲  
 溪(長崎)も門下系列の可能性が考えられる。竹中思順  
 (京都)『済生園正骨要訣』、廣藤道庵(広島)『整骨新書』  
 は『杏蔭齋正骨要訣』の完全な剽竊本であることはすで  
 に論述してある。『吉雄流正骨書』(県立長崎図書館蔵)  
 も附法を八術加え、主術の漢文を省いた巧みな剽竊本と  
 見える。吉原元棟の名は完全に抹殺されている。『正骨  
 範』の二宮彦可の序文によつてのみ吉雄流正骨術は杏蔭  
 齋吉原元棟伝授のものと立証することができる。

(日本歯科大学医の博物館)

(川島整形外科病院)